

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	東京工業大学	整理番号	F03
プログラム名称	グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント養成		
プログラム責任者	岸本 喜久雄	プログラム コーディネーター	齊藤 正樹
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熱意ある積極的な取組が続けられており、体制整備が確実に行われている。 ・プログラム全体がほぼ完成され大変順調に実施されておりすばらしい。 ・オンリーワン性が高く国際的で多彩な取組が精力的に実施されており、学生の意識と能力が高まっている。明確な教育効果が得られており、グローバルリーダーが確実に養成されると期待される。 ・優秀な学生の更なる確保と支援期間終了後の定着・発展のための財政基盤が課題である。 <p>○学位プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「原子炉過酷事故シミュレーション実習」、「核セキュリティ実習」、「リスクコミュニケーション」、放射線の人体への影響に関する「放射線生物学・医学」などオンリーワン性の高い授業が実施されている。当初心配された特殊授業も国内外で実施されたことは高く評価できる。学生は大きな意義と満足度を感じて意欲的に学んでいる。 ・類例のない全寮制の道場（東京国際交流館）での道場自主ゼミや学生どうしの切磋琢磨と国際交流、海外研修、国内外へのインターンシップ、サイエンスカフェ等の多くのプログラムにより、学生は国際感覚、英語討論力、俯瞰力、意見形成力、説明力、自主性を培い、自身の成長とキャリアパス形成上の意義を感じている。 ・「社会・コミュニケーション科目群」「高度国際教養科目群」で原子力と人間社会の関わりなどの人文社会的教養も学んでいる。 ・プログラム活動と専門研究の両立には負担が大きいですが、研究論文執筆・学位審査と関連付けた海外インターンシップ派遣先を選択することや、修士論文執筆時期との重複を回避するなどの配慮により効率的な教育がなされ、学生は時間配分を工夫するなどして、充実した大学院生活を送っている。 <p>○組織・マネジメント体制等について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員は勿論、メンター等も含めた指導・支援体制が完成し十分に機能している。 ・全学4つのプログラムによる「リーディングプログラム連絡会議」を組織し大学執行部との連携を図るなど、中長期的なマネジメント体制が確保されている。 <p>○優秀な学生の確保について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多大な努力が続けられているが、学生の優秀さは確保されている一方で当初計画の定員に満たないのが現状である。本年度秋からの参加学生数については昨年度と同程度の予想とのことであるが、今後支援期間終了が近づき学生の心配が増えることから、楽観できないように思われる。 			

○その他

- ・学生確保のための高専への訪問・PR、支援期間終了後の定着・発展のための検討、学位記へのプログラム名の付記など、中間評価時の留意事項・参考意見の全項目への対応や回答がなされている。

2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- ・学生数が定員に満たない現状は、質の低下を招かないよう厳格な選考を行った結果と理解している。今後も学生の優秀さを重視しかつ多くの学生が参加するよう、他大学該当学部・学科へのPR強化なども含めて努力を続けてほしい。
- ・第1期生の博士後期課程進学時の辞退者について、前期課程修了時点で就職したため後期課程進学者数が減ったという事情は理解した。今後は、プログラム参加者の選考時以前と、前期課程の中でプログラムの趣旨、実績およびキャリアパスをPRすることで進学率を高め、確実にグローバルリーダーとして活躍できる人材を育成してほしい。
- ・これまで少なかった社会人入学者を増やすため、必要な学内規約整備を進め、効果的なPRや、新たな工夫（たとえば後期進学前に就職先を決定し社会人進学する方法）の検討などを含めて、努力を続けて頂きたい。
- ・本プログラムは社会的な必要性和期待が非常に大きなオンリーワンプログラムであるので、「道場」を含め、ぜひ長期にわたり定着・発展させて頂きたい。そのための取組が遅れると、支援終了に伴い海外研修や奨励金が停止・縮小されることへの危惧や、プログラムの魅力低下のため、支援期間中でも今後はプログラム参加者数が減る恐れがある。取組を加速し、学生の不安除去のためにも早期に方針を明確化し広報して頂きたい。
- ・支援期間終了後の財政基盤が大きな課題であるので、全学的に真剣に考えてほしい。他プログラムに比較して学生数が少ないことは予算的に有利なので、今後の競争的研究費改革に伴う情勢変化にも即応して、間接経費の活用や、大学基金や民間からの支援の活用などにより、ぜひ魅力あるプログラムを継続してほしい。